



## 特集に寄せて

西原和久

成城大学社会イノベーション学部教授

『グローバル研究』第6号で、特集として「グローバルな視座から問う沖縄・アジア・太平洋」が編まれることになった。この特集の4つの掲載論文はすべて、2018年12月2日（日）の14:00～17:00の3時間にわたり、成城大学において開催された同名のシンポジウムにおける報告を基にしている。このシンポジウムは、当日、趣旨説明役と司会も兼ねた西原が企画し、成城大学グローバル研究センターが「文部科学省私立大学研究ブランディング事業」の一環として主催したものである。当日の報告者と報告題目は、以下の通りである。

1：熊本博之（明星大学）

「沖縄における自治のゆくえ——無化される民意と辺野古集落の孤立」

2：多田治（一橋大学）

「楽園幻想と観光開発——ハワイ・沖縄・北海道の歴史比較から」

3：知花愛実（ハワイ大学）

「沖縄とハワイ——トランスパシフィックネットワーク構築の動向と可能性」

4：西原和久（成城大学）

「沖縄と東アジア共同体論——トランスナショナルなグローバル研究の意味」

もちろん、当日は時間的制約もあって十分に展開しきれない論点もあったので、今回あらためて論文という形で寄稿いただくことになった。論文作成に当たって、一部でタイトルの変更があるものもあるが、ご容赦いただきたい。当日の活発な議論を踏まえて、内容を手直しすることは妥当なことである。そして、より一層充実した内容の論文を掲載することができたと、コーディネーターとしては大変喜んでいる次第である。

なお、内容に関して、ここで立ち入ってコメントすることは極力避けたいと考えている。それぞれの独立した優れた論考が掲載されているので、直接それぞれの論考に目を通して

いただきたい。したがって、ここでは掲載論文を読むにあたって参考になる周辺情報と若干の感想のみを示しておきたい。(なお、内容のつながりを考慮して、論文掲載は、一部順序を入れ替えてある。以下、掲載論文順に簡潔なコメントを記しておく。)

熊本博之論文は、同氏が長年にわたって調査地・辺野古に住みつくようにして、住民から聞き取り調査をおこない、その目線から日本の自治に関する問題を鋭く抉り出している。同氏は、『現代思想』(青土社)や『世界』(岩波書店)にも論考が掲載されており、この問題の社会学における第一人者で、本論文も非常に考えさせられる刺激的な論稿となっている。

知花愛美論文は、ハワイ大学で博士号(政治学)を取得したばかりの新進の研究者で、シンポジウムの際にはハワイ大学の非常勤講師を務めていた著者(その後、沖縄の名桜大学の共同研究員となり、2019年度からは神奈川大学で常勤として教鞭をとることが決まっている)が、沖縄およびハワイを核に、フェミニズム、環境保護、そして先住民の問題といった切り口から、トランスパシフィックのネットワークを論じている、切り口鮮やかなたいへん整理された論稿である。

多田治論文は、かつて琉球大学で教鞭をとっており、『沖縄イメージの誕生』などの著書でも知られているカルチュラル・スタディーズの主要メンバーでもある論者が、いつものようにたいへん斬新な切り口で現象に迫っている論考である。とくに今回は、沖縄をハワイや北海道との比較という新たな試みを展開して、一種の観光社会学から現代社会を描こうと試みている興味深い論稿である。

西原和久論文は、いわば横軸で沖縄問題と東アジア共同体論の関係を論じ、縦軸でパーソナル・ローカルな視点とリージョナル・グローバルな視点を論じている。議論としてはやや専門的で、とくに後者の横軸の視点に関しては、現象学的社会学の間主観的な相互行為論とトランスナショナル社会学の脱国家的志向の交点を論じることで、沖縄問題の解決のための東アジア共同体への展望を切り開こうとしているグローバル研究の一例である。

いまここでは、これ以上のコメントはすべき場でもないし、それぞれの研究から教えられることが非常に多い論稿の集成に対して高みから評すべき能力も経験も私にはない。それゆえ、中身の紹介は以上までに留めておきた。しかしながら、ご一読いただければわかるように、この特集は、非常に中味が濃く、考えさせられる論稿が多く、今後の社会のあり方を「グローバル」に考えていく際の格好の議論の題材ともなっていると判断できる。

こうしたシンポジウム開催をサポートして下さった皆様にこの場で御礼申し上げますとともに、何よりも当日ご報告賜り、そして今回、貴重な論文を寄稿していただいた皆様に、心から感謝申し上げます次第である。ありがとうございました。本特集が、沖縄の諸問題の解決に対して少しでも貢献できれば幸いである。

2019年3月